

## 第4章 中国国民党と馬英九の戦略

著者	松本 充豊
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	情勢分析レポート
シリーズ番号	18
雑誌名	馬英九再選：2012年台湾総選挙の結果とその影響
ページ	63-76
発行年	2012
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00014678">http://hdl.handle.net/2344/00014678</a>

---

## 第4章

# 中国国民党と馬英九の戦略

松本 充豊

---

2012年選挙を馬英九はどう戦おうとしたのか。自らの再選を勝ち取るだけでなく、彼が第二期の政権運営をスムーズに進めるには、国民党が立法院で過半数の議席を占めていることが必要となる。現職総統として、与党の党首として、馬英九にはふたつの性格の異なる選挙で「二重の勝利」を収めることが課題となった。

本章では、馬英九がそうした課題の実現に向けて、どのような選挙態勢と戦略でふたつの選挙に挑んだのかについて、半大統領制のもとでの大統領（総統）と与党という視点から考察する。まずは、半大統領制における選挙の一般的な特徴と前回2008年選挙の経験を確認したうえで、馬総統への満足度の推移と国民党の改革に焦点をあてて馬英九政権の4年間を振り返る。そして、ふたつの選挙に勝利するための馬英九の選挙態勢と戦略を検証する。最後に、本章での考察を総括したうえで、今後の馬総統と国民党の関係を展望する。

### 1. 台湾の半大統領制と選挙

#### (1) 半大統領制下の政党と選挙

大統領制と半大統領制はともに「民選大統領のいる民主主義」(Samuels and Shugart [2010]) のカテゴリーに属する執政制度である。選挙局面において両者に共通するのは、大統領と議会がそれぞれ別個の選挙で選ばれることである。政党はふたつの性格の異なる選挙への対応を迫られる。大統領と議会は選出母体と選出方法が異なるため、両者の選好にズレが生じる。全国単一選挙区から選出され国民全体から負託を受けた大統領は全国民に対する公共財の提供を目

指すという選好を持ち、地方の各選挙区の選挙民から負託を受ける議員は選挙区の住民に対する利益誘導をおこなおうとする選好を持つと考えられる（松本 [2011: 3]）。そのため、大統領選挙はナショナルな 이슈で争われ、議会選挙ではおもに各選挙区のローカルな 이슈が取り上げられることになる。

現在、台湾の立法委員選挙では日本や韓国と同じ小選挙区比例代表並立制が採用されているが、一般に大統領制における小選挙区制では、選挙民は個々の候補者を基準にして投票先を選択する可能性が高く、候補者の政党への依存は低くなるとされている（建林・曾我・待鳥 [2008: 154]）。候補者にとっては政党投票に比べて個人投票の重要性が高くなる。したがって、各選挙区のローカルな特性の影響を受けながら、候補者は政党からの一定の自律性を持つことになる。このことは半大統領制においても同様である。大統領選挙と議会選挙が同時におこなわれた場合には、選挙民は自分が支持する大統領候補と友好的な関係にある政党あるいは議員候補を同時に選ぼうとする誘因がより強くなると考えられている。そうなれば、政党あるいは議員候補の側も選挙戦において特定の大統領候補への支持を表明し、一体的な選挙活動を展開することで、大統領候補の人気にあやかろうとするだろう。いわゆるコートテール効果である（建林・曾我・待鳥 [2008: 121-122]）。

大統領選挙の選挙戦では、大統領候補の（所属政党の党本部ではなく）選挙対策本部を中核として選挙キャンペーンが展開され、候補者個人の要素が勝敗を分ける重要な要因になるといわれている（Samuels [2002: 471, 480]）。また、マスメディアの発展に伴い、大統領選挙では地方党组织によるいわば「労働集約的」な組織動員の重要性が相対的に低下し、「技術集約的」なメディア戦の重要性と有効性が高まっている。政党の組織力が低下して中間票や浮動票が増加するなかで、こうした傾向はますます強まっている（Weyland [2001: 15-16], Roberts [2006: 135-136]）。

## （2）2008 年選挙

前回の総統選挙と立法委員選挙はいずれも 2008 年におこなわれた。2005 年の選挙制度改革で立法委員選挙には小選挙区比例代表並立制が導入され、立法委員の任期も総統と同じ 4 年となった。これによりふたつの選挙のサイクルは一致したが、実施のタイミングには微妙なズレが生じた。新たな選挙制度のも

とでの最初の選挙となった前回の立法委員選挙は2008年1月に実施され、総統選挙は同年3月におこなわれた。ところが、ふたつの選挙は実際には一体とみなされ、選挙戦が総統選挙に向けて一本化されていたことで、コートテール効果に類似した効果が生まれた。ふたつの選挙における選挙民の投票行動がほとんど同じだったことは実証的にも示されている（小笠原〔2009: 146〕）。

そうした効果が生じた理由として、以下の3つを指摘できる。第1に、総統候補としての馬英九の優位性である。馬英九はクリーンな政治家として知られる。2005年の党主席就任後、国民党の改革を訴えて「黒金」と呼ばれる政治腐敗のシンボルとされた党資産に自らメスを入れる姿勢をみせていた。汚職疑惑が噴出した民進党政権とは好対照をなしたことに助けられ、中間派選挙民に大きくアピールできる魅力となった。そして、台湾アイデンティティに訴えるとともに、「統一しない、独立しない」を原則に現状維持の立場を明確にし、中国との関係改善とアメリカの信頼回復を目指したことは、現状維持が住民の民意の主流であるなかで好感され、独立志向を強めた陳水扁政権と民進党が中国のみならずアメリカとの対立も深めたことに不安を抱く選挙民の受け皿となった。さらに、中台関係の改善をテコにした対中経済交流の拡大のビジョンを示したことも、陳水扁政権下で経済不振に不満を抱く選挙民にアピールするものだった（松本〔2010: 107-114〕）。馬英九は新たなリーダーとしての選択肢を選挙民に与え、彼の政策路線は変革を求める選挙民の期待を集めた。

第2に、国民党陣営内で確立された分業体制がうまく機能したことである。台湾の総統選挙でも総統候補がそれぞれ所属政党の党本部とは別に選対本部を構えて、そこを拠点にキャンペーンを繰り広げるスタイルが定着している。馬英九は自身の選対本部を構えて総統選挙に挑んだ。国民党本部では党主席の呉伯雄の指揮のもとで、立法委員選挙での勝利に向けて同党の組織力を活かした選挙戦が展開された。候補者の公認作業は呉伯雄主席と王金平立法院長が取り仕切り、地方選挙区での動員力の高い地方派閥関係者が数多く公認された。また、選挙資金面でも党本部から潤沢な資金が各候補者に分配された。馬英九の選対本部と党本部との連携は馬英九と呉伯雄との信頼関係によって保たれ、8年ぶりの政権奪回という悲願のもとで総統候補と立法委員候補とのあいだでも利害が一致していた。クリーンなイメージで人気の高い馬英九に立法委員候補はあやかろうとしたし、馬英九も彼らの動員力に依存してでも勝とうとした

(松本 [2010: 104])。

第3に、青陣営全体の団結が保たれていた。宋楚瑜が率いる親民党との選挙協力に成功したことで、青陣営内の政治エリートの足並みが揃った。青陣営の支持者には現状維持志向の「浅藍」から統一志向の強い「深藍」までの広がりがあったが、馬英九には同陣営の共通のリーダーとして支持者を束ねることができる力があった。こうした理由から、2008年選挙では選挙日程に多少のズレがあったものの、コートテール効果に似た効果が発揮され、そのことが国民党の大勝と馬英九の圧勝の一因となった。

## 2. 馬英九政権の4年間

### (1) 対中政策への高い支持

まずは、世論調査を使って馬英九政権の4年間で簡単に振り返ってみたい。台湾の大手テレビ局 TVBS の世論調査によると、就任直前の2008年4月29日の調査では、馬総統の「満足度」は52%だった。就任後、馬総統は憲法遵守の立場から行政院長を行政の第一線に立たせたり、また国民党が絶対多数を占める立法院で幾度となく挫折を味わったりしたことで、彼のリーダーシップに対する住民の疑念が強まり、政権発足1カ月後の6月17日の調査では、満足度は41%に低下した。2008年夏以降は持ち直したが、急落のきっかけとなったのが2009年8月の「八八水害」だった。台風による記録的な豪雨で大災害が発生したが、救援活動への政府の対応の遅れや緊急命令を出さなかった馬総統の判断への批判が強まり、馬政権への信頼が大きく損なわれた。8月16日の調査では馬総統の満足度は16%にまで下落した。その後もアメリカ産牛肉の輸入解禁をめぐる住民の強い反発が巻き起こるなどの要因から、就任3年目を迎える2011年5月19日の調査まで、馬総統に対する満足度は30～40%のあいだで低迷し、「不満足」とする割合(40～50%)が「満足」を上回る状態が続いた<sup>(1)</sup>。また、経済でも馬総統が逆風に晒されたことは、第3章で触れられたとおりである。

そうしたなか、概して高い評価を得ていたのが中台関係の改善だった。2011年5月19日の調査では、馬総統の対中政策についての回答は満足が51%、不満足が41%、「意見なし」が8%となっていた<sup>(2)</sup>。対中政策とそれに基づく中

台関係の改善は、馬総統が政権の実績をアピールするには格好の材料だった。

## (2) 党主席兼任と党改革

馬総統は2009年10月に国民党主席に就任した。兼任の理由は、国民党とりわけ同党所属の立法委員に対するコントロールを確保してリーダーシップを発揮するとともに、再選に向けた次期総統選挙での党公認を確実に手にするためであった。

馬総統は党主席兼任後、翌2010年1月にはもっとも信頼を寄せる金溥聰を党秘書長に任命した。この「馬・金体制」の下で進められたのが国民党の組織と党務の改革、とりわけ地方組織を効率的な選挙マシーンに変えることだった。馬主席と金秘書長は地方派閥への依存から脱却し、党の組織を選挙マシーンに転換することを目指した。不透明な資金投入をやめ、地方幹部（県市党組織の主任）を大幅に入れ替え、党職員を削減し、疑惑のある人物を公認せず、クリーンな候補者の擁立にこだわる党改革を進めようとした<sup>(3)</sup>。

地方派閥依存体質からの脱却は馬・金体制をジレンマに直面させることになった。地方派閥は台湾の黒金の代名詞のひとつであり、国民党の腐敗体質やダークティーンなイメージとは切り離せない存在だった。一方、国民党の地方レベルでの組織動員を支えてきたのも地方派閥だった。地方派閥との関係を断ち切れれば国民党のイメージ刷新につながるかもしれないが、他方で彼らの反発を招き国民党の動員力の低下は避けられない。事実、金秘書長が強引なまでに推進した改革は地方派閥の反発をまねき、複数回にわたる立法委員補欠選挙や2010年11月の五大都市選挙での国民党の敗北や苦戦につながった。

2011年1月に金秘書長が辞任、これに伴い馬主席は台中県（現在の台中市）の地方派閥・紅派出身の廖了以を秘書長にあてるなど党執行部の人事を刷新した。馬主席は新人事を次期立法委員選挙と総統選挙のために打った布石であると語った。金溥聰については今後再選を目指す馬総統の選対本部を立ち上げて指揮することになると伝えられた（松本 [2011: 14]）。要するに、前回の2008年選挙当時と比較すると、馬総統は党主席を兼任することで国民党の党中央を直接掌握していた。集権的な政党である国民党では党主席は絶対的な権威と強大な権力を持った存在である。しかし他方で、馬・金体制のもとでの党改革により地方派閥との亀裂が生じていたのである。

### (3) 宋楚瑜との関係

馬・金体制による党運営の過程で、親民党主席の宋楚瑜と国民党との関係も険悪化した。現状維持を掲げる馬総統が、統一しない、独立しないという基本原則のもとで進めてきた対中政策は、中国との急速な関係改善につながった。それは台湾の主体性を損ないかねないとの民進党の批判を浴びたが、青陣営内にも外省人でありながら統一しないと明言する馬総統に不満を抱く人たちがいた。それが外省人を中心とした深藍の支持者である。各種世論調査によると中台統一を支持しているのは10%程度であり、これが深藍支持者と考えられる。さほど大きな規模ではないが、彼らは国民党への忠誠心の強い人々である。彼らの馬総統への不満は同じ外省人である宋楚瑜への期待に変わり、宋楚瑜もこれを利用して馬総統に揺さぶりをかけようとした。そうしたなか、宋楚瑜がテレビ番組で金秘書長は嘘の世論調査をおこなっていると指摘したことに対し、金秘書長は党のイメージと（世論調査の）専門家としての自分自身の名誉を守るためとして宋楚瑜を告発した。馬総統と金秘書長は宋楚瑜と親民党に対して一切妥協しない断固たる対決姿勢で臨み、もはや政治エリートレベルでの国民党と親民党との連携や協調は不可能となった。

## 3. 陣営の団結と改革

### (1) 選挙対策本部と党本部の一体化

馬英九は総統選挙への切符を順当に手にした。2011年5月に予定された党内予備選挙に立候補を届け出たのは馬英九だけで、この時点で彼が公認されることが事実上決まった。現職総統としての実績と党主席としての権威をもった彼に対抗できる人物はいなかった。その後、馬英九は行政院長の呉敦義を副総統候補に指名した。7月2日の第18回全国代表大会第2次会议（以下、党大会）で、両名は正式に総統・副総統候補として承認された。

今回も馬総統は自らの選対組織、さらには選対本部を立ち上げたが、彼の党主席兼任により党本部との連携が確保された。党本部ビルに隣接する党所有のビルに選対本部が設置されたのは、両者の一体化を象徴していた。選対本部が戦略上の最重要拠点となり、党本部は事実上これに「従属」する格好になった。馬英九から選挙戦略の立案・執行を委ねられたのが、前秘書長の金溥聰だった。



執行長として人事権や選挙資金の配分権をはじめ全権を掌握した金溥聰は、アメリカ型企業のCEOのようなトップダウン方式で選挙戦を指揮した。選挙戦の経験のない35歳の女性や28歳の男性をスポークスマンに抜擢するなど若者にアピールし、国民党の新しさを印象づけたが、その一方で選挙活動の第一線から退けられた名誉主席の連戦や呉伯雄ら党の長老たちのあいだには不満がくすぶった。

選挙資金の分配でも従来とは異なる手法がとられた。国民党では立法委員選挙のたびに党本部から公認候補に手厚い資金援助がなされてきたが、今回は選対本部で選挙資金が集中管理され、各地での総統選挙のキャンペーンには資金が手厚くふりわけられる一方、各選挙区の候補者には最低限の金額しか分配されなかった（陳東豪 [2012: 45]）。ただし、選挙区での現地調査をおこなった小笠原によると、馬英九と金溥聰が擁立した「刺客」候補（後述）には手厚い資金援助が提供されたという。

## （2）立法委員候補の擁立

立法委員選挙の候補者の擁立では、地方派閥との摩擦を引き起こし、地方の組織票を失うリスクを冒してでも党の改革をアピールしようとした。選挙区の公認作業では、従来加味されていた党员投票の結果は排除され、世論調査に基づく公認方式が採用された。党内予備選挙への立候補の届出が複数の場合、まずは調整をおこない、それが不調に終われば候補者の過半数の同意を経て、世論調査の結果に基づいて決定されることになった。予備選挙の結果、現職の有力候補が新人に僅差で敗れるという波乱や、これまでの党運営を含めた党の方針に不満を抱く地方派閥が別の候補者を擁立し、無所属で立候補する事態も起こり、一部では馬英九が調整に乗り出す局面もみられた。また、国会に新たな息吹を送り込むとして民進党が優勢の選挙区を中心に、専門性や知名度が高く、イメージの良い若手の候補者が擁立された。新北市第2区の錢薇娟（バスケットボール選手）、台中市第7区の鄭麗文、嘉義県第2区の陳以真（ニュースキャスター）、台南市第4区の蘇俊賓など、彼（彼女）らは刺客候補と呼ばれた。こうした刺客候補を立てるなどして馬英九と金溥聰が主導した選挙区がいくつもある一方で、状況に応じて妥協したケースもみられた。たとえば、雲林県第2区では、イメージ重視の新人候補の擁立を断念し、現地の地方派閥・許派



の許舒博を出馬させる方針に転換した。馬・金体制への不満を抱く許舒博は党中央との駆け引きを繰り返した挙句、ようやく出馬要請を受け入れた。嘉義県第1区でも、地方派閥・黄派の翁重鈞とのあいだで同じような状況を強いられた<sup>(4)</sup>。

比例区の公認作業では、馬英九が完全に主導する形で国民党のイメージを一新するような名簿が発表された。国民党のかつての比例名簿は地方派閥や政治ボスの権力バランスを考慮したものだった。民進党より約3カ月遅れで発表された今回の名簿では、王金平を第1位に掲載したが、2008年選挙の比例名簿にはなかった社会的弱者への支援活動で貢献してきた社会団体のリーダーをはじめ、環境保護、労働問題、芸術文芸などの専門分野からの代表が名を連ねた。当選の安全圏内とされる17名のうち11名が新人だった。名簿からもれた現職の議員や地方派閥からは不満の声も聞こえてきたが、馬英九はそれを振り切った。馬英九が自らの意向を強く反映させ、派閥均衡型の名簿しか出せなかった民進党との違いを鮮明に印象づけた国民党の比例名簿は、選挙民の好感を招くことになった。

### (3) 潜在的亀裂への対処

国民党は2000年総統選挙の経験から、党が分裂すれば敗北し、政権を失うことを熟知していた。党内では世代交代や党主席直接選挙をきっかけに、連戦、王金平、呉伯雄それぞれと馬英九とのあいだに亀裂が生じていた。馬英九は今回の選挙で亀裂が顕在化し、陣営の足並みが乱れることのないよう対処する必要があった。

まず問題となったのは王金平の処遇だった。王金平はこれまで比例区で2回当選し、立法院長を務めてきたが、国民党の内規では比例区での出馬は2回までとされていた。馬英九はこの内規に特例事項を設けて、王金平を比例名簿第1位に掲載することを決めた。さらに、総統候補として正式に公認された7月の党大会での演説で、王金平による立法院長の続投を希望する考えを表明した。党運営や選挙活動への不満を口にしていた連戦と呉伯雄に対しても、馬英九はこの演説のなかで深い感謝の意を示すとともに、2人の榮譽主席の功績を大きく讃えた。この直後、演台に立った呉伯雄は、「不満があっても、国家の根本的な是非の前ではすべて捨て去ることができる」と語り、団結を訴えた<sup>(5)</sup>。

外遊中であることを理由に党大会を欠席した連戦には、2011年11月のAPEC首脳会議に4度目となる代表として派遣することで、彼に国際舞台での活躍の場を与えた。立法委員選挙での「輔選」（候補者の応援）を任された王金平は、これに全力で当たった。選挙戦の最終盤、連名誉主席は馬英九の要請を受けて、親民党の宋楚瑜主席に向けて青陣営の団結を呼びかけた。馬英九は党内のライバルや長老たちのボイコットも封じ込め、彼らを選挙キャンペーンにタイアップさせることに成功したのである。

## 4. 二重の勝利に向けた選挙戦略

### (1) ダブル選挙

今回の選挙で、馬英九は現職の利点を活かしてゲームのルールを変更した。それがダブル選挙である。これには国民党にとってのリスクもあった。通常、立法委員選挙では各選挙区の特殊な事情を反映してローカルな 이슈で争われ、候補者には選挙民による個人投票が相対的に重要となる。ダブル選挙が実施されると、選挙民は自分が支持する総統候補と友好的な関係にある立法委員候補を同時に選ぼうとするインセンティブが強くなるが、それは立法委員候補の当落が各選挙区でのローカルな 이슈よりもナショナルな 이슈に左右されることを意味する。また、立法委員選挙の投票率が高くなることも予想された。総統選挙の投票率は立法委員選挙の投票率よりも高くなる傾向があり、2008年選挙では前者が後者より18ポイント上昇した。立法委員選挙を棄権し、総統選挙には投票する選挙民は中間派ないし浮動票に近い存在であるとみることができ（小笠原 [2009: 146]）。馬英九の不人気は続いたまま、蔡英文の人氣が急上昇している状況では、ダブル選挙は個々の候補者の実力の弱い民進党にとって有利となり得るゲームであり、とりわけ民進党が優勢な南部では国民党の候補者が苦戦を強いられる可能性が高かった。実際、国民党内で立法委員を対象におこなわれた調査では、北部と比例区の立法委員を中心に半数近くがダブル選挙を支持したのに対し、南部の立法委員は反対を表明、あるいは態度を保留していた<sup>(6)</sup>。馬英九と金溥聰はそうした党内の反対を押し切ってダブル選挙の実施を決めた。

馬陣営には、選挙全体をナショナル・イシューによる勝負に持ち込むことで、



支持者にサインする馬總統，高雄市前鎮区にて（2011 年 12 月 24 日，小笠原欣幸撮影）。

馬英九の勝利を立法委員選挙での過半数議席の確保につなげる狙いがあった。台湾の一定かつ多くの選挙民は国民党あるいは民進党を支持するという固定的な投票行動をとるが、台湾政治の二大勢力の支持構造には組み込まれていない、あるいはそこから脱却した中間派選挙民も存在している。中間派選挙民は台湾全体に比較的均等に分布していると考えられ、彼らは両陣営の政策路線やイメージなどナショナルなレベルでの判断基準に基づいて、いずれの候補者に投票するのかを決めることになる（小笠原 [2009: 145-147]）。馬英九が総統選挙で勝利するには、国民党の固有の支持者のみに頼るのではなく、中間派選挙民の支持をつかみ取らねばならない。それに成功すれば、ダブル選挙という制度設計のもとで、立法委員選挙の投票率が上昇した分だけの票が、比例区では国民党に、選挙区では同党の候補者にそれぞれ投じられ、国民党が過半数議席を獲得できる可能性が高まることになる。

さらに、副次的効果として、立法委員候補に対するディシプリンも期待できた。そもそも半大統領制における小選挙区制では、議院内閣制の場合と異なり、候補者にとって個人投票が相対的に重要となり、それだけ彼らは党中央からの自律性を有することになる。立法委員選挙が先におこなわれた場合、候補者は

自らの選挙では必死に戦っても、一旦当選が決まれば、馬英九の再選のため必ずしも積極的に支援しない可能性が残されていた。選挙民が総統候補との友好的な関係の度合いを基準に、立法委員選挙での投票先を決めることになれば、立法委員候補も馬総統のキャンペーンに積極的にタイアップせざるを得なくなるとの読みがあったものと思われる。ただ実際には、民進党が優勢な南部では馬英九との関係を敢えて表に出さず、総統選挙と切り離して自分の選挙戦を戦った候補者も少なからず存在した<sup>(7)</sup>。

## (2) 有利なナショナル・イシューによるメディア戦

馬英九がもっとも有利に戦え、中間派選挙民の支持を期待できるイシューは、現職としての実績のある対中政策だった。第2章でみたとおり、中国との関係では、馬英九は中華民国という国家のもとでの現状維持路線と「92年コンセンサス」の堅持を掲げた。「92年コンセンサス」は蔡英文が否定したことで争点化し、中国側が蔡英文に「台湾独立派」のレッテルを貼りつけて「加担」したことで、馬英九は中台関係の改善という実績に加えて、現状維持と中台関係の発展と安定という選択肢を選挙民に示すことができた。蔡英文が取り上げた国内の経済格差の問題では、国民党は民進党が打ち出した政策に追従することで、馬英九との差別化を図ろうとした蔡英文の戦略を封じ込めた。さらに、馬英九は比例区の公認候補選びで社会的弱者にも配慮する姿勢を明確にし、派閥均衡型の名簿しか出せなかった民進党との違いを鮮明に選挙民に印象づけた。

国民党の改革もまた都市部の中間派選挙民にアピールするための重要なイシューだった。これまでの党改革の延長線上で、選挙戦でも地方派閥依存体質からの脱却を図ろうとする馬英九と金溥聰の姿勢は、選挙民に国民党の刷新をアピールするものとなった。宋楚瑜と親民党との関係についても同様のことがいえる。両党の協力が青陣営の支持者の共通の願いであると親民党に向けて団結を訴えながらも、密室での利益交換を排除する姿勢を崩さなかった。それはまた、馬総統が自らの現状維持の立場を改めて明確に示すことで、中国との過度な接近に対する選挙民の不安を解消することにもつながり、馬総統を不甲斐ないと批判しながらも、国民党への強い忠誠を抱き続ける深藍支持者にはジレンマを突きつけるものになったと考えられる。

そして、自らに有利なナショナル・イシューによる勝負を効果的に進め、中

間派選挙民の支持を取り込むための手段となったのがメディア戦だった。馬陣営はこれまでの地方組織による組織動員に代えて、世論調査を重視してメディアを活用する戦術を採用した。第2章でみたとおり、馬陣営は独自の世論調査を駆使して、正確な情勢判断に基づいた広告や宣伝をおこない、選挙民へのメッセージを効果的に発信した。地方派閥への依存から脱却を図ることは、彼らの動員力に依存できなくなることを意味する以上、馬陣営は組織動員に代わる新たな手法を見出す必要があった。ナショナル・イシューで争われる総統選挙ではメディア戦が重要であり、また有効でもあるため、それによって組織動員を代替することが可能であったし、地方派閥との関係を断ち切ることで国民党の刷新を中間派選挙民にアピールできた。また、地方組織による動員から解放されて中間派となった選挙民も、メディア戦で再び吸い上げることができると考えられた。

こうした戦略を支えたのが国民党の財力である。国民党は選挙資金の面で民進党に比べて圧倒的に優位である。莫大な党資産を除いても、国民党の銀行預金の利息は昨年1年分だけでも39億元に達したという。さらに、国民党には大企業からの多額の献金が寄せられる。馬英九の選対本部がインターネットやテレビで放った広告は150本を超え、その製作費用は約3億元ともいわれている（陳東豪 [2012: 45]）。国民党のメディア戦略の成功にとっては、広告・宣伝の量や質だけでなく、国民党系のメディアをうまく利用して、馬英九の再選に向けた雰囲気を作り出したことも重要だった。

## 5. 総括と今後の展望

馬英九は再選という最大の目標を達成すると同時に、立法委員選挙でも前回よりは議席を減らしたものの、国民党単独で過半数の議席を確保した。二重の勝利という課題が実現されたのである。国民党の改革を進めることで、たとえ地方の組織票を失うことになっても、国民党が優勢な北部を中心に固定的な支持者の票を固めて、さらに都市部を中心とした中間派選挙民の票を上乗せることで総統選挙での勝利を狙うという、馬英九と金溥聰の戦略は見事に成功したといえる。一方、ダブル選挙が立法委員選挙に与えた影響は判断が難しい。北部の候補者には概ねプラスの相乗効果があったものと考えられるが、ダブル

選挙になったがために再選に失敗したといえる現職候補もいた<sup>(8)</sup>。

国民党が立法院で再び過半数の議席を確保したことで、馬総統は二期目の安定した政権基盤を手に入れたかにみえる。そもそも半大統領制では大統領と議会とのあいだには構造的な選好のズレが存在しており、台湾の事例も例外ではない。したがって、馬総統が今後安定したリーダーシップを発揮できるか否かは、与党内の党内政治が鍵となり、それが二期目の馬政権の諸課題への取り組みを左右することになるであろう。与党内の党内政治でのもうひとつの注目点が党改革、特に地方組織の選挙マシン化がさらに進むかどうかである。地方派閥依存体質からの脱却はクリーンな政治の実現を掲げる馬総統の重要課題である。今後、次の選挙（統一地方選挙）まで約2年の時間があるため、再選によりさらに権威の高まった馬総統がこのあいだに党改革に取り組む可能性はある<sup>(9)</sup>。いずれにせよ、今後の馬政権を展望するにあたって、馬総統と与党・国民党の関係がどう展開するかは興味深いところである。

#### 【注】

- (1) TVBS 民意調査「馬英九總統就職三週年民調」([http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201107/iracgo82xm.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201107/iracgo82xm.pdf) 2012年3月28日アクセス)。なお、以下で特に記述しない資料のアクセス日は2012年3月28日である。
- (2) 同上資料。
- (3) 小笠原欣幸「馬英九政権論（その2）」（小笠原欣幸ホームページ〔以下、小笠原HP〕 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/paper/mayingjeou2.html>）。
- (4) 小笠原欣幸「2012年台湾立法委員選挙選挙区情勢」（小笠原HP <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/analysis/Lelection2012constituencies.pdf>）。
- (5) 「馬向大老温情喊話 吳伯雄：大是大非前 不爽攔一邊」（『中國時報』2011年7月3日）。
- (6) 「總統立委 朝併選方向規畫 藍營高層已有初步共識 併選不需修法 交由中選會決定 藍委北部支持南部反對」（『中國時報』2011年3月1日）。
- (7) たとえば、高雄市第1区の鐘紹和は馬英九と並んで撮影したポスターを使用せず、雲林県第1区の張嘉郡（女性）は「ふたりの女性」（総統選挙は蔡英文，立法委員選挙は張嘉郡）に投票するよう訴えていた。刺客候補の陳以真でさえ馬陣営のカラーを出すことは極力抑えて彼女自身の魅力やイメージを強調していた（「總統立委分裂投票 藍綠各取所需 中南部藍委『小雞抬母雞』小英氣勢旺要『母雞帶小雞』戰法不同 票很難抓得準」，「鐵桿馬家軍 就是要和馬綁作夥」（『中國時報』2011年11月22日）。
- (8) 小笠原の調査によると、高雄市第1区の鐘紹和，高雄市第2区の林益世，嘉義市の江義雄，宜蘭県的林建榮がこれに該当する。
- (9) 選挙後の国民党の人事異動からは、馬総統が党改革に向けた布陣を整えつつあることがうかがえる。とくに党の組織仕事を担当する組織發展委員会の主任には金溥聰に近い蘇俊賓が就任した。



## 〔参考文献〕

(日本語)

小笠原欣幸 [2009] 「2008 年台湾総統選挙分析——政党の路線と中間派選挙民の投票行動——」(『日本台湾学会報』第 11 号 129-153 ページ)。

建林正彦・曾我謙悟・待鳥聡史 [2008] 『比較政治制度論』有斐閣。

松本充豊 [2010] 「国民党の政権奪回—馬英九とその選挙戦略」(若林正丈編『ポスト民主化期の台湾政治——陳水扁政権の 8 年——』アジア経済研究所 95-121 ページ)。

—— [2011] 「苦悩する与党」(『中国文化研究』第 27 号 1-18 ページ)。

(中国語)

陳東豪 [2012] 「文宣轟炸，議題操控，是他的致勝要訣 金小刀早知道會贏」(『新新聞』第 1297A 期 pp. 44-45)。

(英語)

Samuels, David J. [2002] “Presidentialized Parties: The Separation of Powers and Party Organization and Behavior,” *Comparative Political Studies*, 35(4), pp. 461-483.

Samuels, David J., and Matthew S. Shugart [2010] *Presidents, Parties, and Prime Ministers: How the Separation of Power Affects Party Organization and Behavior*, Cambridge: Cambridge University Press.

Weyland, Kurt [2001] “Clarifying a Contested Concept: Populism in the Study of Latin American Politics,” *Comparative Politics*, 34(1), pp. 1-22.

Roberts, Kenneth M. [2006] “Populism, Political Conflict, and Grass-Roots Organization in Latin America,” *Comparative Politics*, 38(2), pp. 127-148.